



みなと

みなと 66 号 2022 年 12 月 1 日
兵庫県声の図書赤十字奉仕団
〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通 1-4-5
日本赤十字社兵庫県支部内
(Tel) 078-241-9889 (Fax) 078-241-6990
代表者 足利教治
編集者 土岐淑子

COVID—19（新型コロナウイルス感染症）が 2020 年年初から世界的パンデミックを引き起こして丸 3 年を迎えようとしています。

いまだ終息に至ってはいませんが、国内での行動規制はかなり緩和されて日常生活に戻りつつある中、日赤兵庫県支部のイベントや声奉内の研修も一部再開され沢山の団員が参加されました。

*令和4年度第1回赤十字防災ボランティア実践講習会(2022年7月3日)

神戸 YWCA 原田いづみ



私達はニュースで被災地の状況を見ると、何かしなければならぬ、なんとか元の日常を取り戻してほしいと切に願う。その思いで災害ボランティアに参加することが多い。そして、壊れた家屋やインフラ設備が私達の知る「日常」に戻ると、ほっとして、良かった。と思う。

しかし、「かたち」が戻ることだけが本当の復興ではないこと、災害で失ったものは形あるものだけではないことを、数々の災害を通り抜けてきた人達は知っている。その時、ボランティアは何をすればよいのだろうか。

今回 7 月 3 日に日本赤十字社兵庫県支部で行われたボランティア実践研修会ではこころのケアの大切さを学ぶことになった。

私達はよく「その立場になって」と言うが、人はさまざまである。高齢者、体の不自由な人、子供、被災者でありながらコミュニティの中で救護活動もしなければならぬ人。みなそれぞれに異なる喪失感、焦燥感を抱えている。「立場になって」私達は動けるだろうか。

研修ではケーススタディを通して、それぞれ違う立場の人の役を演じることで、どう感じたか、どんなニーズがあるか考えることになった。私は五才の子供の役になったが、やってみて今迄そのような立場に想像が及ばなかったことを痛感した。あらためてボランティアの役割の重さ、責任を思い、より真摯に向き合う必要を感じた。

研修ではその他にもボランティアとして活動する人の健康についても、体だけではなく心の問題があることを学び、その対処についてのアドバイスを受けた。

3 時間半の研修であったが、テーマが多く、終わった時にまだまだ考えないといけないことがあるように思い、時間が足りないと感じた。そんな中でも防災ボランティアとして実際に活動されている方の話も聞くことができ、思いを深めることができた。戴いた「ボランティアとこころのケア」という小冊子を今、読み返している。

*災害拠点病院多数傷病者受け入れ(2022年10月15日)

はあもにい 石田展子

2022年10月15日(土) 晴天とはいえ10月とは思えない冷たい風が吹くなかで、“災害拠点病院多数傷病者受け入れ訓練”が、日本赤十字社兵庫県支部で行われました。世界規模で群発する自然災害、人為的事故、そして戦争、、いつ明日は我が身となるかわからない状況の現在、この訓練の重要性をあらためて認識いたしました。

参加者は、マリスト国際学校の生徒さんや我々声奉のボランティアの方々等、約20人の傷病者役が集合。

それぞれトリアージを受け、手首には赤色、黄色等、傷病に合わせてのリストバンドを装着。赤色は重症者で、ストレッチャーで移動。黄色の私は歩行困難、腹部強打、呼吸困難ということで車椅子で運ばれる事に、、、。

「それなりに演じて下さい」との言葉に傷病者になり切り、2階の災害用簡易ベッドの並ぶ部屋へ移動、そこで問診、検査等の診察を受けた。

ベッド数は約30床ぐらいある。

日本赤十字社兵庫県支部姫路赤十字病院からの応援の方々も来られており、混乱もなくテキパキと対応。

傷病者には毛布もかけられ寒さも多少やわらぎほつとする。

手際良い対応、安心感を与える話し方や表情等、不安やストレスが体調を更に悪化させる状況のなかでの医師や看護師さん達の対応には頭が下がり、心に深く刻まれました。

CT検査、点滴が終わり、私は病室へ移動という事で終了。

実際の現場はもっと修羅場であろうが、どんな状況であれ、最初に出会う方の話しかける言葉、声、表情等がいかに大切な事を再認識。

私達、声奉にたずさわる一員として、この思いを大切に、これからもかかわっていきたいと思います。

貴重な体験をありがとうございました。



*令和4年度赤十字防災ボランティア総合訓練〈ぼうさいこくたい〉

(2022年10月22日・23日)

青年 三木 実

2022年10月、防災国体が開催されました。

防災元神戸大学教授室崎先生を筆頭に、盛大に開催されました。

赤十字ブースは、西側入り口近く、アンケートに答えてガチャして景品は血液センター担当の景品と缶バッジは、子どもに人気。仮設トイレの案内は指導員の皆さん、テントの外で、無線奉仕団が無線体験など盛りだくさん。そして声の図書奉仕団担当は何をしたかと申しますと、テントの外入り口で、呼び込みを兼ねて子どもの心をつかんで、赤十字看護師さん、赤十字職員ユニホームをまとして記念撮影。将来は赤十字スタッフ確定と言いながらテントの中に入っただき、段ボールベッドの気持ちよさに私も寝たかったところを譲ってお父さんもお母さんも一緒に昼寝。起こすのをためらいながら、鬼の心になって起こして、聞きたくないだろう説明をそこは日ごろの訓練の成果で朗読のごとくつつらと段ボールベッドの気持ちになって、被災地で少しの工夫で辛い避難生活を快適にできることを知っていただき、日ごろから工夫する訓練をしておくと、いろいろな場面で助かることに繋がる参考にしていただければというような奥深い段ボールベッドでした。

同じ時間に、別の場所では、赤十字競技会が開催され、蘇生法レース、三角巾法レースなど、4人グループ一組で開催。

日ごろの訓練とチームワークを競い合う楽しいイベントも盛りだくさん。人に説明だけでなく自分自身、参加者の大笑いで元気をいただき、子どもの笑顔で心を丸くしなければならぬことに気づかされました。声の図書奉仕団は、声ばかりで実際にお会いできる機会が少ない中、声の図書奉仕団は各グループに自慢できる筆頭グループと感じ嬉しかったです。役員のご足労されている皆さんに感謝申し上げます。



***声奉勉強会（校正）（2022年10月19日・11月16日）**



ことばの花束 長谷川洋子

（一回目）～校正について考える～

10月19日（水） 講師 池内早苗さんによる校正勉強会を受講しました。

まず朗読・音訳を見直す会の三木京子さんの司会で始まり、池内さんから今回は主に単行図書の校正についてすすめていきますということの説明があり、この日の受講者は14名でした。

池内さんのこれまでの積み重ねて学ばれてきたこと、経験や、大切にしなければいけないこと、ポイント、技術などをわかりやすく丁寧にレジュメに沿ってお話してくださいました。

辞書についての話などもされたあと

校正とは 原本と音声を照らし合わせて、書いてあることが正確に音声化されているか、また聞いてわかる音声化ができているかもチェックすること。

- ① 校正の目的は 著作権法第二十条（同一性保持権）の遵守
製作側と、著者及びリスナーとの信頼関係の構築のため
- ② 校正の責任は 兵庫県声の図書赤十字奉仕団にある。⇒日赤の図書を製作しているという自覚をしっかり持つ。
- ③ 校正の方法は 全文をヘッドフォン・イヤフォンで録音時と同じスピードで聞く。
また音訳者と同一版原本（版によって内容が違っていることもあるので）で校正する。
- ④ 校正者の役割は指導者ではなくチームワークの意識を持ち、普段から知識を増やしておき、注意力、忍耐力、客観的な判断、そして謙虚な姿勢でのぞむ。不確実なことは必ず辞書などで調べる。
- ⑤ 校正のチェックポイントは「声奉の録音図書製作マニュアル」に沿っているか。
誤読、アクセント、切り方、読み詰まり（雑な図書と思われるので）などに注意する。
アクセントは読むときは正しく読むよう努力することが大事だが、校正では文意が間違っ
て伝わる場合に指摘する。
- ⑥ 音量、音質、ノイズ、間、発音なども注意する。
- ⑦ 校正表の記入の仕方は、簡潔にわかりやすく、具体的に、がポイント。特別に調べた時など備考欄に典拠を記入。書き方は、丁寧過ぎず 乱暴過ぎず。
- ⑧ 訂正作業については 校正者が気づいたことは原則としてすべて校正表に上げるが、音訳者が納得いかない場合は校正者と話し合ったり、第三者の意見を聞くなどして、最終的な判断は音訳者がする。訂正しない場合は理由を記入する。
- ⑨ 参考までに、良い録音図書とは「聞くことに集中できて長時間聞いても疲れない」図書といわれている。

訂正して良くなることはない⇒下読みを十分にしておき、音訳の段階できちんと録音することが大事。

校正の勉強は初めてで大変勉強になりました。謙虚に心をこめ注意深くと改めて思います。
また池内さんはじめ今回の勉強会の企画、準備、実施にお世話下さった朗読・音訳を見直す会、単行図書検討会、日赤の皆さま本当にありがとうございました。

第2回には宿題も出ています。少しドキドキ、でも楽しみに。次回もお世話になります。

デイジー班



デイジー班 (Digital Accessible Information System の略です)
声のアルバムがリスナーのもとに届くまで・・・

デイジー班はマザーチーム、発送チーム、受入チームの3つのチームに分かれて作業をしています。マザーチームは各グループで制作した図書を集めて、声のアルバムとしてマザーCDを作成するチーム。発送チームはマザーチームによってできあがったCDをコピーしてリスナーに発送するチーム。受入チームはリスナーから戻ってきたCDを整理するチームです。

アルバムに使用する媒体は、繰り返し保存ができるCDRWで、1枚1枚汚れをふき取り、大事に使っています。また、問題無くコピーできるように、4か月に一度データを全消去しています。

マザーCDは問題無く再生できるか確認し、サブマザーと呼ぶ3枚のCDにコピーする元となります。これもまた問題無く再生できるかを確認します。次に4台あるコピー機のトレイ1枚ごとにコピーが終わったCDを聴いて確認します。確認作業はここまでで、異常が無ければ順次コピーを進めて行きます。以前はコピーしたすべてのCDを聴いて確認していましたが、作業効率を上げるため、この方法に変更しました。

そうしてできあがった声のアルバムは郵便の無料制度を利用して、リスナーのもとへ届けられます。聴かれて戻ってきたCDは、受入チームの手により次の発送に向けて整備されます。

ささやかな活動ですが、聴き手・送り手双方に潤いをもたらすものになればと願っています。

(前川芳子 ともしび)



点字班



点字班では例会時、点字の学習をしています。点字を読み、書く。基本的な事を常に学びながら、点字に親しみ、その奥深さを理解したいと思っています。

そのため教材を探すのに一苦労します。図書館での点字の本は少なく、皆様と共に探している状態です。今回紹介する「くろはおうさま」は先月まで教材にしていた点字の黒い絵本です。真っ黒な紙にふくらみのある点や線のイラストが、透明な樹脂インクで描かれています。目の見えない主人公トマスが音や匂い、触り心地などの視覚以外の感覚を研ぎ澄ませて、色をとらえている様子がつづられています。ボローニャ国際児童図書展で優れた児童書に贈られるラガッツィ賞を受賞した、とても美しい絵本です。

作者は 文が メネナ・コティン。イラストが ロサナ・ファリア。どちらもベネズエラの方です。

トマスが 言ってたよ

黄色は からし。 ぴりりとからいけど、ひよこの羽みたいに ふわふわ。

赤は イチゴみたいにすっぱくて、スイカみたいに甘い。

だけど すりむいた膝小僧からのぞいた時は 痛い。

(中略)

青は空 たこを揚げていると、日差しで頭が熱くなるときの空。

雲が広がって雨が ぽつぽつ降りだすと、空は白くなる。

だけど、雨を見ようとお日様が顔をだしたら、色がみんな出てきて空に虹を書く。

お日様が当たっていないと、水はつまらない。色がないし、味もおいもしないから。

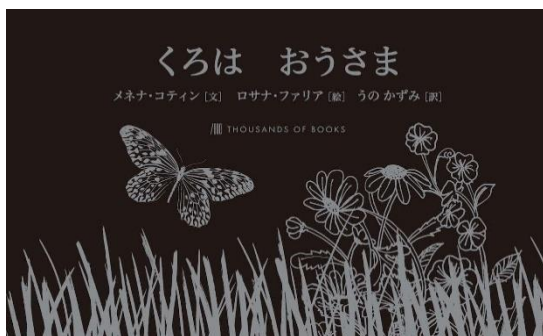
緑は刈った草のにおい。メロンの味。

そして、黒は 色の王様。

抱き寄せられて、ママの髪にふんわり包まれるとき、黒は絹みたいにすべすべ。

トマスはどの色もみんな大好き。聞いたり におったり さわったり 味わったりできるから。

(門田真弓美 ことばの花束)



点字班 例会と作業

毎月第2火曜日 (8月は休み)

10時～15時

＊活動の様子を見学に来られませんか、一度点字を書いて見ませんか。

朗読・音訳を見直す会



2022年5月の例会にて、「録音図書製作マニュアル＜第3版＞」の見直しについて話し合いました。新しく入会する団員にとって、マニュアルは必須のものであり、また経験者もマニュアルを見ながら作業しているので、改訂した方が良いという結論になりました。朗読・音訳を見直す会だけではなく、単行図書検討会、デイジー班、IT班も一体となって改訂作業を進め、無事「録音図書製作マニュアル＜第4版＞」を12月に発行する運びとなりました。

今回は「声のウォーミングアップ」と「滑舌」を話題に取り上げます。

・「声のウォーミングアップ」（音訳マニュアル 音訳・調査編より）

発声練習で、いきなり「アッ、エッ、イッ、ウッ、エッ、オッ、アッ、オッ」と叫び出さないようにしましょう。声帯を守るためにはウォーミングアップが大切です。

まずは軽く体を動かし、次に腹式呼吸をします。息を吸うときに丹田（おへそからにぎり拳ひとつ下の所）が前方にできるようにします。息を吐くときは、あまり考えなくても勝手にお腹がへこみ、息を吐ききったら無意識にお腹に空気が入ります。次にS音（suではなくs）を出し、それからハミングをします。どちらも声帯に負担がかかりません。そして、「ハー」「アー」と徐々に声帯を使います。大きな声ではなく、息とともに自然に出る声。次は、あごと唇の体操です。「にらめっこ」や口を一字にしたりして筋肉を動かします。舌の体操も忘れずに。音訳では、通常の会話以上に、子音をハッキリ出す練習も必要です。

・「滑舌」（毎日新聞 2022年7月30日より）

新聞の人生相談に「滑舌を良くしたい」というお悩みが載っていました。私も滑舌に自信がなく、「～なのです」が続くとお手上げです。ちなみに、「自分の滑舌に自信がない人は、自分の声をテープにとって聞く方法が一番有効」との意見もあり、音訳はその意味では最高の教材です。お悩みの回答者は劇作家・俳優の「渡辺えり」さんです。以下引用します。

私が劇団を旗揚げした頃、関西出身者が多く、「かきくけこ」を無声音にする（声帯の振動を伴わずに発する）訓練をしました。また、言いにくい「な行」や「た行」、「ら行」の言葉などを組み合わせた早口言葉を作って練習しました。一部を紹介します。毎朝3回発声し、覚えたら、できるだけ早くしゃべってみてください。唇だけではなく、口を大きく開け、「い段」の時は特に唇もほおの筋肉も上げるようにしてください。

「なんだつて？なんなんだ。なににぎやかになににぬねののっと乗ってんだ。ねんねんねんねんねんなな。ねねむのねってののんがのん。はぬけのばあさんはふはふへひへひ孫がまねしてはひふはへふへふ、はひはふへはふふふんはへひほ、へへふふはっはふへへはふ。

るんばるんばるんばるんば、らりろれろんろ、りるれらりんり、れろらりるんる、ろらりるれんれ、ろれりら。立田さんのつてたより、たつての頼みに頼んだ多田さん、ただでてきばきトテツチタタ。取ってつかんだ手と立った土田さん量んだタコたたみ、タコつままれつつまれチツチツタタ。」

（今野由美子（こすもす））

単行図書検討会



単行図書検討会は、8名で月1回会合を持ち、推薦図書等を選定し録音者を募集することなどにより、日赤の蔵書充実を図っています。

今年度は、そのほかに4月から9月まで「録音図書製作マニュアル」改訂に伴い、添付資料の単行図書録音手順及び枠アナウンス用紙をはじめとする各種様式の検討を行いました。聞きやすい単行図書を製作するために、録音者がわかりやすく使いやすい録音手順や記録用紙の様式等を、皆が忌憚なく意見を出し合い細かく検討し、改訂しました。

さて、2022年4月～9月までに完成した単行図書は11冊です。また、現在録音中の図書は19冊です。図書の録音、校正等に携わってくださる皆様、本当にありがとうございます。図書の録音には時間も労力もかかりますが、完成した時の喜びや達成感は他に代えがたいものがあります。さらに、それを利用者が喜んで下さると思うと感慨も一入です。

単行図書の貸し出し、返却受け入れは、ことばの花束グループが担当しています。このコロナ禍のためか、単行図書の利用が増加しています。中には短期間で聞かれ、次々に貸し出しを希望される利用者もいます。そういう利用者は日赤の蔵書のかなりを読みつくされているので、毎回、まだ読んでいない図書を探すのは大変です。新しい単行図書がほしいと痛切に感じるときです。

2022年4月以降、録音をしていただいているのは、4グループと実人数23人(複数冊録音者あり)です。

視覚障がい者用の単行図書を製作する機会には普通にあるわけではありません。折角、声の図書赤十字奉仕団に入り、音訳や校正、デージー製作を学んでこられている皆さんですから、この機会に単行図書製作に取り組んでみませんか。皆様の参加を是非お待ちしております。

松永照子(ことばの花束)

I T 班



I T 班の現状

2022年2月、I T関連と機材チームが合併しI T班が声奉の作業班として発足しました。メンバーは冨沢さんと神坂さんと足利の3名でしたが、4月に高橋晶子さんの参加があり4名となりました。9月に冨沢さんがゆうゆう会へ異動され作業班に所属出来なくなった為、協力頂くように都度応援を依頼申請して共に活動を行っています。

作業の大枠は、パソコン等機器管理とI T関連です。最近行った作業では、各作業用のパソコンのウィンドウズのアップデートとブース1と2のパソコンの入れ替えや、ルーム南パソコンのデスクトップ画面の編集を行いました。又、I T関連ではリンク集のアップや改訂作業は、班員4人で分担し手分けして作業を行っています。

現在リンク集にアップしている項目は、運営委員会の議事録や各種用紙等35項目あります。今後新しくアップする項目については本部の承認が必要となりました。アップをご希望の項目があれば本部へ申請をお願いします。

コロナ禍において、2020年6月から開始したルームやブースの使用者の重複を避けるために導入した、「ルーム&ブースの予約表」のアップや管理も重要な作業となり現在も活躍中です。

声奉の活動を維持してゆくためには、各グループの活動に加え各作業班の活動も不可欠です。I T班としても将来を考え増員が必要です。簡単なホームページはワードやエクセルで作成できます。アップの手順もそう難しくはありません。その他パソコンのアップデートや種々の操作についても、一緒に勉強しながら覚えて頂きます。一部分でも手伝って頂ける方、興味をお持ちの方はお気軽に班員に声かけください。よろしくお願いします

(はあもにい 足利教治)

プログラム紹介

「旅」

(ともしび)

『旅』は昭和59年10月より季刊で制作していましたが、今年から年2回、冬号と夏号に変更となりました。

『旅』はメンバーや友達、外部の方が訪れた国内外の紀行文やインタビューを録音しています。そして、六甲山に登ったり車で滝を見に行ったり、電車に乗って少し遠くまで行ったりして楽しみながら『旅』の題材をみんなで探しています。

今はコロナ禍で、インタビューも楽しいお出かけも思うように出来ませんが、リスナーに少しでも『旅』の気分を感じてもらえるようにこれからも取材をしていきたいと思います。

(ともしび 三中徳子)



リスナーだより



中原まり子様 2022. 4. 12

花時計 3月号を聞かせてもらいました。

わくわくドキドキ、どんな人に会えるかな。

権藤将輝さんですが知らなかったです。

須磨の映画、本をつくられた方がいるとは知りませんでした。

(中 略)

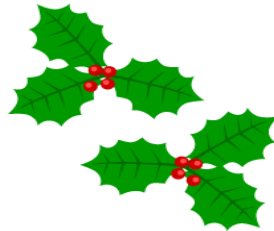
いろんなところで活躍されていて今後の活躍も期待したいところだなと思いました。

「スマバレイの錆びれた時計塔」の朗読劇ですが、楽しく聞かせていただきました。

音楽が流れていますが、聴いたことがあるものばかりだなと思いました。

いつも選曲がいいなと感心しています。

次回も楽しみに待っていますね。



香山良樹さま 2022.7.28

鳥の声や自然環境のお話しありがとうございます。

人間は良い人も悪い人も沢山いますが、破壊的なことをする人も沢山います。

本当に平和であってほしいですね。

こういう話題がありましたら取り上げて頂くよう希望します。

リスナーからのお便り もっと届いていますが、ボランティア
ルームのホワイトボードに掲示しますので、ご覧ください。